

日本声楽発声学会 学会通信 第55号

2026年(令和8年)3月

◆ ご挨拶

会長 佐々木正利

会員の皆さまにおかれましては、健やかに午年を迎えられたことと存じます。その新しい年も早三分の一が過ぎ、気づいてみれば得体の知れない焦燥感とともに、当学会も新年度を間近に迎えようとしています。

翻って小生の思いに目を転じてみれば、ついこの間のこと、務まるかしらんと不安いっぱいの思いに捉われながらも、学会に寄せる愛情だけは人一倍のものがあるとして武者震いしながらお引き受けした会長職も、特段の成果も挙げられずに、忸怩たる思いの中にもうすぐ任期満了を迎えます。

実は就任時、これだけはしっかりやり遂げたいと思うことが二つありました。一つは、1382年ジョン・ウィクリフの英訳した聖書の序文“The Bible is for the Government of the People, by the People, and for the People”ではありませんが、「会員の、会員による、会員のための学会」にするため、今一度原点に立ち返って、わたしたちの学会はどういった組織で、会員のために何を研究対象とし、どのようなアプローチを持って活動するのか、という基本理念を確立、または見直し、そのために必要な倫理の構築を詳らかにしたいというものでした。そして今一つは、世の中に声楽発声に関する様々な文献は数多くあれど、一つひとつの用語の解釈や定義がそれぞれ千姿万態で統一が取られておらず、かつて日本声楽発声学会編として音楽之友社から出版された『イタリア古典歌曲集』や『コンコーネ50番』まではいかなくても、当学会が2010年10月に刊行した『声楽発声用語集』の改訂版として、用語定義の規範を世に示したいとするものでした。

さて結論から申し上げますと、前者は「IT 促進部」を組織して小森輝彦委員長を中心に真摯に議論を積み重ねておりますが、残念ながら未だ具体的な提案にまでは至っておりません。また後者につきましても、「声楽発声用語集・改訂委員会」を組織し作業を開始しておりましたが、委員長の西浦美佐子氏の突然の退会申し出もありませんして途中で頓挫した状態となっています。そのあとを田中昌司理事が引き継がれ、現在ようやく作業が再開したといった状況にあります。これも偏に、会長としての小生の至らなさに拠るものと大いに反省しておりますが、この二つの命題に関しましては、6月より組織再編される新理事会に申し送り事項として引き継いでいただけますようお願いする所存です。

ところで、前段で初志について述べましたが、それ以外にも、この任期中を含めて、結構長い間役職に就いて感じてきた課題があったのですが、やはりこの3年間でも改善されなかったことを報告しなくてはなりません。無論のこと、担当者がのほほんとして手を拱いていたのでは決してなく、唯一無二といっても良い真摯な姿勢で鋭意取り組んできたのですが、依然なかなか先が見えない難題として立ちはだかっています。その課題というのは次の二点です。一つは、どうやって会員を増やしていくかについて、もう一つは未納会費の回収についてです。

どちらも学会の屋台骨を揺るがす一大事ですが、簡単に克服できる課題ではありませんでした。少なくとも特效薬はなく、その解決には、会員お一人おひとりの地道な努力、慮りと働きかけが求められます。そして言えますことは、このまま会員が増えず、未納会費も雪だるま式に増え続けると学会運営に多大な支障をきたすことは自明なため、危機感を持っての対応が、今後いっそう強く求められることになるでしょう。

私の住む岩手は、かつて日本のチベットと言われましたが、その北上山地の奥深く、タイマグラ（アイヌ語で「森の奥へと続く道」という意）なる秘境で、電気がない時代から自然とともに清貧に暮らしてきた農民作家 一条ふみさんが残した次の言葉が心に思い出されます。「たとえ生活のレベルは最低でも、精神の高みは最高であることを目指してるのさ」と。

本学会は、会員数も規模も決して大きなものではありませんが、凡そ声楽発声に関わる多くの同志とスクラム組んで、小事や枝葉末節に至るまで決して侮らず真摯に取り組む姿勢を堅持し、一人ひとりの会員の思いを汲み、寄り添って真理を明らかにしていく使命を、ここに改めて確認したいと、任期を終えるにあたって心新たにしています。今後も一会員として続けて頑張っていく所存です。皆さま、協力して学会の更なる発展に尽くそうではありませんか。

コロナの禍根がまだまだ残るこの3年間、強い支えと励ましを本当にありがとうございました。衷心より御礼申し上げます。

◆ 第117回例会アンケート結果

11名の方にご回答いただきました。ご協力に感謝いたします。主なご意見は以下のとおりです。

【プログラム構成について】

聴取実験は、多少の時間のオーバーは許してあげてもよいのではないかと／研究発表がもう少しあっても良いのではないかと／充実していて良かった

【日程について】

日曜日が望ましい／土曜日開催は嬉しい

【学会サロンについて】

会場で自分の意見を言うのはなかなか難しい雰囲気だと思った／さまざまな意見があると感じた／会員の忌憚ない発言の場として大変良い試みかと思う

【特別講演について】

本学会の趣旨とずれているのではないかと／数人のいろいろな立場、学校でのオペラの取り扱いとか、なぜオペラが必要か、オペラでの声楽発声法など、シンポジウムにした方がいい／現在行われている現場からの視点として重要と受け取った／内容は飛び飛びであったが面白いお話だった／さまざまな角度から、オペラや音楽について語っていただき、演奏家をどう育てるか、どう演奏会を継続させるか、など考えさせられることが多かった／経済的問題や現状打破へのお話としては良い刺激となった

【現役声楽家の演奏とお話について】

演奏はすばらしかったが、発声法についてのお話を聞きたかった／日本語、伊語、仏語、いろいろな言語での演奏を聴くことができて良かった／もう少しお話の時間があっても良いかと思った

→関連記事:P.4~5

→第117回例会報告:P.8~9

///理事会よりアンケートのお願い///

当学会の活動の柱となるのは年2回の例会と夏季研修会ですが、運営していくうえでの事務労力と費用は、会費の徴収、学会通信の発行、3年ごとの理事選挙が大きな割合を占めています。特に、会費徴収率の低下、印刷費・郵送費の高騰は、本来の活動にかかる費用を圧迫する状態となっています。そこで理事会では、運営コストを抑え、かつ会員の皆さまの利便性を向上する方法を模索しています。

つきましては、会員の皆さまのお声を種々の変更反映させたくアンケートを実施することにいたしましたので、ご協力をお願いいたします。

【実施期間】2026年4月30日締切

【回答方法】下記からご都合の良い方法でご回答ください

- ・QRコードから回答(匿名で集計)
- ・回答をメールで送信
- ・記入済みアンケートをファックス送信または写真を送信

●デジタル化内容説明

《会費徴収》現在は郵便振替のみ対応。ゆうちょダイレクト利用以外では、支払いのために郵便局あるいはATMに出向く必要がある。一方「徴収システム」を導入した場合、初期登録の手間と一定の手数料がかかる。

《学会通信》現在は、印刷→封入→郵送。またホームページにて全ページのカラー版を閲覧可能。印刷・郵送費用が高騰しているためページ数削減、例会案内等との同時発送などで対応している。「原則デジタル化」の方法としては、ホームページに掲載した段階で該当ページのURL(QRコード)を一斉メール配信し郵送は希望者のみとすることが考えられるが、送料を別途徴収するか、が問題となる。

《選挙システム》予備選挙、本選挙とも資料を郵送、投票用紙に記入→返送。学会通信同様、封筒を含めた印刷費・郵送費の負担は大きい。デジタル化(オンライン選挙)を導入した場合も、紙による投票を希望する会員への配慮は必要となる。オンライン化に必要なシステム、費用等については現在調査中である。

[アンケート]

Q1-1 会費徴収方法に自動引き落とし・クレジットカード払い・コンビニ払いを導入することに賛成ですか

賛成 反対 どちらともいえない

Q1-2 ご意見をどうぞ()

Q2-1 年2回発行の学会通信を原則デジタル化とすることに賛成ですか

賛成 反対 どちらともいえない

Q2-2 ご意見をどうぞ()

Q3-1 理事選挙のオンライン化に賛成ですか

賛成 反対 どちらともいえない

Q3-2 ご意見をどうぞ()

アンケートフォーム QRコード→



事務局メールアドレス QRコード→



事務局 FAX 03-6804-0626

皆さまからのご要望・ご質問にお答えします

当学会では、2024年5月例会よりご参加の皆さまへのアンケートを行い、また第117回例会では「学会サロン」を企画し、運営に対するご要望やご質問をいただきました。理事会では、すべてを共有し改善・解決方法を模索しています。今期理事会の総括として、検討中の課題等々をまとめました。

● 例会日程について

Q：5月例会が奏楽堂日本歌曲コンクール本選と重なるため考慮してほしい

A：会則に明記されている通り、当学会の事業年度は6月1日～5月31日です（第5条の5）。また、「原則として」ではありますが、5月と11月に例会を開催する旨記載されています（第17条）。年度末となる5月例会では、会計報告や各種審議を伴う総会も併せて行われますが、決算処理、監査、予算案作成、議案作成にはかなりの時間を要し、なおかつ同日配布の「声楽発声研究」作成スケジュールとの兼ね合いもあり、日程の前倒しはかなりむずかしい状況です。日程を後にずらし6月開催とした場合には、新事業年度が始まってからの総会開催となり、業務の空白期間が生まれることとなります。加えて、会場としてお借りしている東京藝術大学の予約は6か月前からですが、奏楽堂日本歌曲コンクールの要項発表は例年12月であり、本選日程を確認してから例会日程を決めるのは会場確保の点からも無理があります。したがって、理事会としては現在のところ、外部団体の行事に関わらず5月例会・総会は5月最終日曜日に行くことを原則としたいと考えています。

Q：例会日程が5月最終日曜日、11月最終日曜日から変更になる場合、早めに知らせてほしい

A：会場（東京藝術大学）の予約は6か月前からで、当然のことながら学内行事が優先されます。5月・11月最終日曜日の予約が取れなかった場合には、理事会にて日程・会場変更を検討し、決定次第ホームページにてお知らせしています。学会通信・例会チラシの郵送はホームページ掲載よりも遅くなりますので、ホームページお知らせ欄でご確認いただきますようお願いいたします。

● 夏季研修会会場について

Q：夏季研修会地方開催のメリット（会員増など）を考え、継続を検討してほしい

A：現在、会員の約半数が関東近県在住となっています。地方開催のメリットもありますが、全国各地からのアクセスの良さも考慮に入れ、今のところ首都圏開催を原則とし、数年に一度は地方開催を企画、というのが、現理事会の考えです。

● 各種資料配布について

Q：研究発表、講演等の資料がほしい

Q：事前配布してほしい

Q：学会通信は原則としてデータで配布、希望者のみ郵送にしてはどうか

A：研究発表、講演資料については、発表者・講演者の意向に沿って資料配布をおこなっていますが、第117回例会の研究発表では、事前に提出された「発表概要」を印刷配布しました。ダウンロード

ド可能な資料作成につきましては、今後の検討課題といたします。また、公開レッスンの曲目等、参加者の皆さまご自身での準備が必要と思われるものについては、決定次第詳細をホームページでお知らせしています。学会通信データ配布につきましては、印刷費用軽減のためにも実現に向けて検討中、会員の皆さまのご意見を広く伺いたく本誌でもアンケートを行っておりますので、ご協力をお願いいたします。

● その他

Q：例会、夏季研修会以外に講習会や講座を開いてほしい

A：現状では、5月・8月・11月の企画・準備を行うことで手一杯の状況ですが、例会・研修会の講師等につきましては皆さまのご要望にお応えできるよう検討していますので、アンケート等でご希望をお知らせください。

Q：例会・研修会をリモート配信してほしい

A：理事会でもたびたび検討課題となっておりますが、技術的な問題、費用面での課題に今のところ行く手を阻まれている状態です。とはいうものの、リアルタイム配信が一般化された社会から学会が取り残されていくわけにはいきませんので、前向きに検討していきたいと考えています。

Q：学会の目的、会員の資格について

A：当学会が設立されてから60年経ち、社会の状況も変化してきました。今一度初心に立ち返るとともに、現代社会にふさわしい学会としてさらに進化できるよう「学会理念」を明文化すべく検討しています。目的、会員の資格についてもその中に記載し、総会で皆さまのご意見を伺う予定でおります。

理事会では、皆さまからのご意見を受け止め、運営に反映していくために議論を重ねています。目に見える変化はわずかかもしれませんが、決して立ち止まっているわけではありませんので、今後ともアンケートへのご回答をお願いいたします。

～ ～ ～ ～ ～

◆ 第118回例会・第62回総会、2026年度夏季研修会のお知らせ

●第118回例会および第62回総会は、2026年5月31日（日）東京藝術大学にて開催します。

研究発表は小川暁美・佐々木幹雄両氏と陣内直氏、特別講演は川井弘子氏、現役声楽家の演奏とお話には宮里直樹氏（テノール）をお迎えします。詳細はホームページ、チラシをご覧ください。また、総会では、理事選挙結果、決算、予算等、学会を運営するうえで重要な議題が審議されますので、会員の皆さまは万障お繰り合わせのうえご出席、または委任状のご提出をお願いいたします。

●2026年度夏季研修会は8月23日（日）東京藝術大学を予定していますが、2月26日に発生しました奏楽堂舞台上部の天井音響反射板落下事故のため、施設の借用に影響が出ています。日程・会場の変更がある場合、ホームページにてお知らせしますので、ご注意ください。詳細が正式に決まりましたら、改めてご連絡いたします。

■■ 追悼 三林輝夫先生 ■■

当学会名誉会員の三林輝夫先生が、2025年11月14日、87歳でご逝去されました。

1996 (H8) ~ 2001 (H13) 理事

2002 (H14) ~ 相談役

2021 (R3) ~ 名誉会員

[研究発表等]

1993 (H5) 「現役声楽家の演奏とお話」

1993 (H5) 夏季研修会「フランス歌曲の魅力」、コンサートにて演奏

1994 (H6) 夏季研修会「フランス歌曲の歌い方～歌詞の読み方（発音）から演奏法（曲作り）まで、皆で一緒に歌いましょう」

● 三林輝夫氏 追悼に寄せて

山田 実(顧問)

揺るぎない信念と、絶えることの無い歌への情熱で、その指導力を長年に渡り振るわれ、日本の声楽会を牽引された三林輝夫氏、サンバが、昨年11月に逝去されたとお知らせに、また一人、声楽界、学会の宝が旅立たれたかと、寂しい限りです。同じ東京藝大出身ではありますが、小生とは六つ違いで、在学中にご一緒することはありませんでした。仕事仲間として長きに渡り、様々な場面で一緒の機会に恵まれました。

三林輝夫氏は、1938年生まれ、新潟県のご出身です。音大受験準備に、毎月、新潟から8時間かけて上京され、東京藝術大学音楽学部声楽科入学、同期には、丹羽勝海、淡野弓子、平野忠彦の諸氏がおられ、1963年同校声楽専攻科を修了、木下保、渡邊高之助、古沢淑子、C.モラーヌ、P.ベルナック、G.スゼー氏らに師事されました。

1963年東京労音オペラ『フィガロの結婚』バジリオ役でデビュー、その後、二期会や東京室内歌劇場等々、数多くのオペラで目覚ましい活躍をなさいました。ニューヨークから帰国したばかりの小生も、オペラでご一緒しました。親友だった大町陽一郎君指揮の「トスカ」で、スポレートをダブル・キャストで歌ったのは、若き日の楽しい思い出です。サンバは、制作現場全体にも目を向けつつ、円滑な進行に気配りのできる冷静さが有り、感心させられたものです。その後も、オペラ、オペレッタ、創作歌劇に出演され、オペラ制作でも多くの実績を残されたのも、それらの才を遺憾無く発揮された所以であろうと納得です。

ご研究の中心であり、第一人者として高い評価を得たフランス歌曲で、十数回にわたるリサイタルを重ねられました。当学会でも、夏季研修会において、「フランス歌曲の歌い方～歌詞の読み方（発音）から演奏法（曲作り）まで、皆で一緒に歌いましょう」など、度々貴重な講演を担当して下さいました。フランス歌曲のみならず、日本歌曲の分野でも、歌唱における美しい発語表現を披露され、渾身の研究成果である歌唱表現を次世代に紡いで行くべく、後進の指導にも生涯尽力なされ、東京藝術大学名誉教授、奏楽堂日本歌曲コンクール運営委員長、二期会オペラ研修所所長などを歴任されました。

存分に声楽界の為に働きつづけ、優秀な後進を多数輩出され、誇れる音楽家人生だったのではと心から敬意と拍手を送ります。

サンバ、お疲れ様でした！

● 三林先生を偲んで

岡部ゆかり（会員）

三林先生がご逝去されて三か月が過ぎようとしています。

お通夜の会場は花に溢れ、そこには多くの知り合いと多くの私の知らない方々がいらっしゃいました。私はその場で先生が今まで関わっていらした広い世界と多くの時間を感じました。

追悼の文を依頼された時に、先生とのご縁を感じながらも私が書かせていただくのはおこがましいようにも思えました。幸いにして私以上に先生を知っている友人知人がいましたので話を聞くことにいたしました。話を聞かせてほしいという頼みに忙しいはずの友人達全員が時間を割いてくれました。感謝の気持ちを込めて、友人達の先生への思い、先生からの言葉をお伝えしたいと思います。

その前に私の存じ上げる範囲で三林先生について少しお伝えしますと、オペラ歌手であり、東京藝術大学の教授から名誉教授になられ、また東京二期会では研修所所長、理事、そして監督として数多くのオペラ公演にも関わられ、当学会においては理事、名誉会員となられました。そして日本歌曲、フランス歌曲の大家でもいらっしゃいました。

三林先生の門下のお一人は、先生の言葉に対する感性、繊細さに魅かれて門を叩いたそうです。同じように別の友人からは「日本語のその後ろにある情緒や情景が廃れてしまわないようにしっかり歌っていきなさい」と言われ、身の引き締まる思いがしたと聞きました。また、ソロコンサートに向けてレッスンを受けた友人には「どんな言語であってもお客様に納得していただけるように歌えなければいけないよ」とおっしゃったそうです。

またある知人は、ザルツブルク留学時にヨーロッパ旅行中の先生が寄ってくださり、ある場面で先生が流暢な英語を話されたことが忘れられない、堪能でいらしたのはフランス語だけではなかった～と笑いながら、でも少し寂しそうに話してくれました。三林先生の凜とした佇まい、誰に対しても同じ距離をもって接する姿勢、それは近い人にとっては少し先生との距離を感じるものであったかもしれませんが、先生の音楽に対する首尾一貫した真摯な向き合い方の表れでもあったのでしょうか。

別の友人は話の最後に“三林先生は本当に音楽を愛していましたね”と言いました。“良い演奏をするためには時間を惜しまず勉強する、ということをお学ばせていただきました”と。

晩年の先生の言葉で締めくくりたいと思います。「わたしには若い人たちに伝えたいことがたくさんあるんだよ！それが僕の使命だと思っている」。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。



三林輝夫先生の「音楽への情熱と愛」は、多くの方に引き継がれていることと思います。

日本の音楽界をずっと見守ってくださいますように…

ご冥福をお祈りいたします。

そして、ありがとうございました。

2025年11月29日、第117回例会終了

毎年この時期の上野公園は、色づいた銀杏を見上げながら心地よい散歩コースです。動物園に向かう家族連れ、美術館の入場を待つ人々、噴水広場のイベント(今回は錦鯉品評会)で楽しむグループを横目に、例会会場である東京藝術大学へ…。

第117回例会は、研究発表2件、初の試みである「学会サロン」、中橋健太郎左衛門氏の特別講演、高橋薫子氏による「現役声楽家の演奏とお話」というプログラム、参加者数は正会員・臨時会員合わせて約60名でした。

1件目の研究発表は齊田晴仁会員、「日本の近代音楽黎明期の日本歌曲研究」と題して、山田耕筰の肉声の



音響分析に基づく発表が行われました。山田耕筰が残した「歌の唄ひ方講座 第2巻」(昭和3年発行)の音源と解説書——現在は「山田耕筰の遺産(13)歌の歌い方と音楽鑑賞編」としてCD化——には、呼吸・喉頭・共鳴腔に関して図入りで解説があり、日本における100年前の著作としては画期的なものであったと思われます。音源は、山田耕筰自身の「開いた声とつまんだ声の比較」などの実演によるもので、解剖学も念頭に置きつつ歌の指導を行い、また日本語の特性と発声法の知識があったからこそ、彼は多くの日本歌曲を生み出すことができたのでしょう。

発表は、「山田耕筰は100年前に、欧米の発声法をそのまま真似るのではなく、日本語の特性を生かした発声法、発音法を既に考えていた」という言葉でまとめられました。前述の資料は、東京文化会館音楽資料室に所蔵されています。機会があれば、手に取ってみてはいかがでしょうか。

続く2件目の発表は、森幹男、梅村憲子両会員による『「頭の後ろを意識して声を出す」発声指導の効果について』です。まず、研究に至った経緯として、教育学部入学前にまったく声楽経験がない、音楽を選択していない学生に対する「声楽指導」の難しさが語られました。「頭の後ろを開けて」という指導は果たして科学的に有効なのか、を音圧比に注目した実験結果と口腔内形状の変化などから明らかにしようという試みです。



視覚の影響によって音の聴こえ方が変わる「バイアス」を実際の演奏で用いることはよくありますが、科学的な根拠を求めるには、純粋に音のみのデータで分析する必要があります。前方0.2m、後方0.2m、に加え前方1mに配置したマイクロホンを使った録音からは、「発声時に後ろを意識することにより、実際に後方の音圧が上昇、かつ前方1mの音圧も上昇」という結果が得られ、しかも防音室ではこの効果が得られませんでした。また、MRIによる口腔内の観察では、後ろを意識した場合、舌根が下がり軟口蓋が上がる、この結果には再現性がある、という結果でした。今後、声楽を経験していない人も含めたサンプル数が増加すれば、声楽指導における言葉がけとしての実効性が立証されることになります。また、音楽ホールでの収録、音場の可視化、副鼻腔等前方の響きの検討が予定されているようで、これらはまさに現場で役立つ研究結果となることでしょう。



さて、初の試み「学会サロン」の司会は佐々木会長。会員の皆さまが日頃感じておられる学会運営などに対するご意見を伺い、今後に活かしたい、という趣旨説明に始まりました。

- ・例会の発表に際して、資料を配布してほしい
- ・当学会の方向性を明らかにしてほしい
- ・全国の音大関係者の発表の場としてほしい
- ・夏季研修会等で公開レッスンを行った講師に個人レッスンを受けるにはどうすればよいか

・郵送されている学会通信をデータ配布にしてはどうか

などのご意見に対し、現在の状況、今後の課題等が会長、副会長から説明されました。すでに理事会で検討中の案件も多く、残る任期で何らかの方向性を見いだせれば、と強く感じる30分となりました。



午後最初のプログラムは、指揮者・ピアニストとしてご活躍の中橋健太郎左衛門氏をお迎えし、「日本オペラ界の未来について～裾野を広げる為に～」と題する特別講演です。バブル崩壊後経済が縮小する中で、若者が歌い、演奏し、裏方仕事をし…オペラを作り続けていくためのヒントが、たくさんの事例とともに次々と繰り出されます。

プロスポーツに見られるような演出や、会場で来場者がもっと楽しめるような工夫はできないか。音楽をビジネスとしてとらえると…。明治時代に西洋と肩を並べようと取り入れられた「クラシック音楽」をより深く知るには映像作品から学ぼう。イタリアオペラの作曲家もベートーヴェンの影響を受けていた、伝わり変遷していく音楽において「本物」を過度に意識する必要はない。字幕付き上演がスタンダードになったとはいえ「原語上演」にこだわり続ける必要はあるのか。集客においてはエンタメ業界に学ぶ。映像作品に触れ、制作背後や演出に思いを馳せる大切さ。劇場と街づくりの相互関係。若手をどう育成するか。アウトプットの場を増やし、抜粋や演奏会形式よりもオペラを一本演じ切るメリットなどなど。めまぐるしくも楽しい1時間半のお話の最後にはご自身の主催・指揮による「ランスへの旅」(ロッシーニ)終盤——オーケストレーションを工夫し、プロアマ合わせて25名で12万円——を聴かせていただきました。日本が直面するクラシック音楽業界、音楽文化との向き合い方など、音楽を生業とする人間に気づきの多い講演でした。



さて、会場を第6ホールに移しての「現役声楽家の演奏とお話」には、高橋薫子氏をお迎えしました。美しいパープルのドレスでご登場の高橋氏、平井康三郎の歌曲「びいでびいで」「夏の宵月」を続けて歌われたあと、ご挨拶をはさんでの歌は、コミカルな身振り手振りを加えての「うぬぼれ鏡」。そして中田喜直の歌曲を3曲（「悲しくなったときは」「むこうむこう」「髪」）。さらに木下牧子の歌曲を3曲（「風をみた人」「竹とんぼに」「お伽噺」）。日本歌曲は、軽快な曲、たっぷり歌い

上げる曲を取り混ぜての選曲で、聴く人を引きつけます。しかも、ここまで前半の約30分は、ほぼ歌いどおしというパワーにも驚かされます。後半はプッチーニのアリア「Quand me'n vo'」に始まり、ロッシーニの歌曲「La promessa」「La fioraia fiorentina」。「La chanson du Bébé」ではかわいいベビーボンネットをかぶっての歌唱に、大きな拍手が送られました。プログラム終盤は、優雅なフランス歌曲（アーン「A chlois」「Si me vers avai ent des ailes」）と華やかなアリア（グノー「Air des bijoux」）で、たっぷり聴かせていただいた1時間でした。

ふだん気をつけていることは？ という会場からの質問には「よく寝ること」。指導することも多いので、歌い過ぎずよく休むようにしている、とのことでした。とはいうものの、艶やか、のびやかな声を維持するには、たくさんのご苦労・ご努力があったことと思います。今後ますますのご活躍が楽しみとを感じるコンサートでした。

この第117回例会詳細は、声楽発声研究 No.16 に掲載予定です。

なお、特別講演と「現役声楽家の演奏とお話」の講師は、理事会で決定、依頼していますが、学会例会のメインは会員による研究発表です。締切は例会の6か月前、随時募集していますので、現場での実践発表も含め、皆様のご応募をお待ちしています。

(広報部・入川)

◆ 新入会員紹介

正会員としてお迎えした方のうち5名から、自己紹介のご投稿をいただきましたのでご紹介します。

(50音順・敬称略・①略歴②抱負など)

○江崎いずみ (えさき いずみ)



①名古屋音楽大学卒業。日本声楽家協会研究所在籍。

②この度は貴重な学びの機会をいただきまして心より感謝申し上げます。自身にとっての一番良い声で自然な歌唱をし、聴いてくださる方が心地よく耳を傾けてくださるような演奏を目指し悪戦苦闘しております。日々の小さな気付きが励みになっております。研究会では深く広く勉強させていただき、たくさんの気付きができるよう精進していきたいと思えます。どうぞよろしくお願いいたします。

○小川一夫 (おがわ かずお)



①慶應義塾大学医学部 昭和 43 年卒。一般内科医。現在八王子市内の医療機関で外来診療と訪問診療に従事。35 歳から合唱を続けつつ、何人かの先生に声楽の指導を受けてきました。

②内科医の自分が、自分を実験台として発声を科学的に理解して、わかりやすく表現できたら、多くの方の役に立てるかも知れないと考えながら自分の歌唱の向上に努力してきました。F.フースラーが ” Singen ” で明らかにした感覚と発声器官との関係についての研究が、その後どのような進歩をしているのか知りたいというのは入会させていただいた大きな動機の一つです。

○高木千郷 (たかぎ ちさと)



①大阪音楽大学音楽学部声楽学科卒業。関西二期会準会員。みつなかオペラなどに合唱で参加。2023 年シャンソン・ポピュラーコンクール最優秀賞受賞。現在は歌手およびボイストレーナーとして活動。

②クラシックとマイク歌唱の両立を目指す中で発声に関心を持ちました。自らの学びを深めるとともに、僅かでも皆様のお役に立てることがあれば幸いです。

○高山潤子 (たかやま じゅんこ)



①東京芸術大学古楽科声楽専攻修了、スコラ・カントルム・バジリエンス修了、バーゼル音楽院声楽教育専攻、最高点にて修了。

②発声学会では、恩師である故川上勝功先生に連れられ、学生時代に受付等、お手伝いさせていただきつつ、たくさん勉強させていただきました。近年、在住先のスイスで青少年の発声指導を行う機会が増え、改めて、日本で研究、研鑽を積み重ねている皆様と交流、情報共有などができたらと、入会申請をいたしました。よろしくお願いいたします。

○谷田 優（たにだ ゆう）



①愛知県立芸術大学音楽学部声楽科卒業。二期会オペラ研修所修了。オランダにてアレクサンダーテクニーク講師資格を取得。NeVLAT 認定講師。現在は音楽家や俳優、指導者に心身の使い方を伝えている。

②発声や音楽表現を豊かにするために、心と体をどう使っていくかということをも角的な視点からさらに深めていきたいと考えております。よろしくお願いいたします。

ご入会いただき、ありがとうございました 今後のご活躍をお祈りいたします

当学会では、随時新入会員を募集しています。正会員1名の紹介とともに入会申込書をご提出いただき、理事会で承認後、正会員として登録されます。学会の活動に興味を持っている方が身近にいらっしゃいましたら、ぜひお声かけください。

詳細は事務局までお問い合わせください。



日本声楽発声学会事務局 QR コード→

● 理事会記録（2025 年 11 月～2026 年 3 月）

理事会は、会長の招集により適宜開かれ、事業や刊行物の進捗状況確認、新たな提案の審議、新入会員の承認などを行っています。欠席理事からは、事前に委任状およびご意見を提出していただいています。

総会（5 月 31 日）にて、事業報告、事業計画、その他の報告と議決が行われます。

	日時	場所	主な議題
第 7 回	2025 年 11 月 11 日（火） 19：00～21：00	Zoom 佐々木、齊藤、森井、竹田、入川、梅村、小森、鈴木、田中	第 117 回例会について／オンライン選挙の導入について／新入会員・退会申請について 他
第 8 回	2026 年 1 月 26 日（月） 19：00～21：00	Zoom 佐々木、齊藤、池田、竹田、森井、入川、梅村、鈴木、田中、渡辺	第 118 回例会について／2026 年夏季研修会について／新入会員・退会申請について 他
第 9 回	2026 年 3 月 9 日（月） 19：00～21：00	Zoom 佐々木、齊藤、池田、森井、入川、梅村、小森、三枝、鈴木、竹田、田中	理事選挙について／第 118 回例会について／2026 年夏季研修会について 他

● 執行部会記録（2025年11月～2026年3月）

執行部会では、さまざまな検討課題の優先順位など、理事会運営の方向性を決定しています。

第7回	12月22日（月）19:00～21:00	Zoom
第8回	1月13日（火）18:30～20:00	Zoom
第9回	2月9日（月）19:00～21:00	Zoom
第10回	3月20日（金）19:00～21:00	Zoom

事務局からのお知らせ

◎研究発表募集

第119回例会（2026年11月予定）、第120回例会（2027年5月予定）における研究発表を募集しています。

内容：研究または実践の口頭発表

申込：発表題目と発表者氏名を明記した発表概要（1000～1200字）を学会事務局宛て提出

応募締切：それぞれ2026年5月および11月末日

例会は、原則として5月と11月の最終日曜日に開催しますが、会場の都合等で変更になる場合があります。最新情報は、ホームページでご確認ください。

◎会費納入のお願い

2027年度会費の納入期限は2026年5月31日ですので、よろしくお願いいたします。

編集後記

今期の理事会任期も残すところわずかとなりました。芽吹く前の小枝のように、理事会の中にも小さな変化の兆しがあることを感じ取っていただければと感じています。次期理事会にそのエネルギーを引き継いでさらなる発展を祈りつつ…（入川）

日本声楽発声学会事務局 佐々木 徹

e-mail:info@jars-voice.org

Tel/Fax:03-6804-0626

〒154-0002 東京都世田谷区下馬 3-14-4

振替口座：00170-0-119920

日本声楽発声学会 HP

<http://www.jars-voice.org/>



学会通信第55号

2026年（令和8年）3月発行

発行者：日本声楽発声学会

編集者：入川めぐみ 上杉清仁

齊藤祐 森井佳子